里山をみんなで考えるフォーラム終了後の
質問等に対する回答について

１１月１４日に開催しました「里山をみんなで考えるフォーラム」終了後のご質問やご意見に対する回答は、下記のとおりです。

１　質問

県外の先進被害地の対策、優良事例を教えてください。

回答（黒田委員）

先進被害地にも様々な場所があり、そのまま参考にはなりませんが、以下のような例があります。

①　まず、海岸林（クロマツ）で面積が狭い場合は、薬剤散布と枯死木伐倒駆除をきちんと実施すれば、被害はほぼゼロにできます。世界遺産の三保松原（静岡）では、専門家委員会で非常に綿密な指導を続け、被害本数を１本／ha 以下にできました。毎年、防除計画は精査して継続です。

しかし、松枯れ防除の専門家によるサポートが無い場所は、海岸でも失敗しています。

②　松本のように山腹での被害が発生した場合、薬剤散布は被害地全体には実施が困難で、しかも、被害地の傾斜のために伐倒駆除が十分できません。

また、民家に近いことから住民による反対が出ることも多いです。島根県のある市では、一度散布を中止し、枯死率が上がった後に、再度散布の要望が出ました。

しかし、専門委員は、その段階で薬剤散布を再開しても効果が出ないこと、健康被害の心配で反対者がいることから、散布中止が妥当であるとしました。マツ枯れ後には広葉樹が成長しており、禿げ山にはならないと説明しました。この点は松本と同様です。

③　多くの府県では、薬剤散布や樹幹注入の予算をつけていますが、極めて小面積への防除なのでその効果は限定的で、それよりも、マツ林から広葉樹林への変化によって、被害量が減っています。

２　意見

松が枯れた後の広葉樹林への移行（そのままにしておけば）は、見れば分かるレベルなのですが、行政として「そのまま」は言いにくいし、まだ知識の少ない住民には受け入れにくい話になると思います。

具体的に「この地域は何年後にどうなる」を「ビジュアル」に示していただくことが納得しやすいと思います。地図の上に示していただくことが良いかも

しれません。先を見通せないことが不安を呼び、健全な森の再生への道を妨げているように思います。

回答（黒田委員）

森の場所ごとに、また、土壌や斜面の方角などが少し違っても、森林再生にかかる時間や構成広葉樹の種類が違ってきます。マツの減り方（枯死木の増える速さ）によっても、後代の林の生育状態は違います。そのため、地図に何年後にこうなると描くのは大変難しいです。だからこそ、近隣にお住まいの方々や森林散策に出かけた市民が、日常的に森を眺めて、徐々にどう変化するか見守ることが重要になります。

なお、細かいことはさて置いて、ざっと概要を予測するなら、２０年で一つの区切りという見方ではできます。シカの加害が進まない場合という条件付きですが、今生えてきた広葉樹が２０年生になった状態は、井田先生がご説明されたように予想できています。

回答（香山委員）

広葉樹林への移行は生態学的な事実ですが、「そのまま」でも大災害が起きるようなことは無いという程度の意味で、地域の生活者の立場から考えれば、何もしなくても良いということではありません。野生動物の被害が拡大していることを考えると生態的にも放置すべきとは言えません。

積極的な森林整備は必要で、景観整備、木材活用、森林空間としての活用など、森林を地域の資源として活かすことは、地域経済にとっても重要です。

ビジュアルに将来像を描いた分かりやすい普及、啓発はとても重要だと思います。分かりやすく伝えるためには、森林の専門家とデザインや映像の専門家が協力することが重要になるでしょう。

３　意見

山林所有者の高齢化もあり、整備したくてもできない状況にあると思います。市民ボランティアを募って、興味のある方に整備してもらうのも一つの方法かと思います。

回答（香山委員）

市民参加は、森林活用のためにも重要です。しかし、森林の高齢化によって、樹木も大きく育ち、森林所有者や市民のボランティアに対応できる範囲は狭くなってきました。今後の森林整備には、専門的な技術が必要です。技術者に安心して仕事を任せられるための仕組みづくりを市民参加で進めることができればと思います。

回答（黒田委員）
森林の作業は危険が伴います。基礎勉強や実習を十分に行ったうえでのボランティア活動なら、整備の補助は可能かも知れません。

参考（耕地林務課）
市民が森林に興味を持っていただくことは、非常に大切なことであると認識しています。
現在、市では、岡田地区において、市が森林所有者と貸借契約を結び、市民ボランティアによる自発的な森林整備を実施しています。
今後も、住民や市民ボランティア等との協働による森林整備について、研究していきます。

4　質問
気が早い心配かも知れませんが、広葉樹林に遷移したのち、ナラ枯れの被害にあう可能性も気になります。いずれにしても、利用し、手入れをしながらつき合っていくのが望ましいのでしょうが、広葉樹林に遷移した先はどのように変化していくのでしょうか。これからの世代が、身近な山の未来のイメージを共有するために知りたいです。

回答（井田委員）
１００年後を推定すると、シラカシとかアラカシといった常緑のカシ類が優勢となっていると考えられます。ただし、これは、シカによる稚樹への摂食圧がないという前提です。もし、シカの密度が増大すれば、森林の成立が大幅に遅れたり、想定外の生態系に変化したりする可能性があります。

回答（黒田委員）
ナラ枯れの被害は、このままナラ類ばかりの森になった場合は、５０年後には発生する可能性があります。しかし、ナラばかりではなく、他の樹種も増えてくると、ナラが枯れても、森の変化としては危機的なこと（全滅に近いなど）にはなりません。つまり、広葉樹に変化したから安心というのではありません。今後、委員会でも検討したいのは、「どのように森林を管理したら、持続性のある健康な森になるのか、そのためには資源としてどう利用するのが良いのか」など、将来の構想です。「広葉樹の森なら放置して良い」とは言えません。